

## まえがき 仮名の可能性と〈音〉への関心

平安時代の文学は、〈音〉を現前させる仮名文字の発明によって、飛躍的な発展を遂げることとなった。この場合の音というのは、音声それ自体ではなく、仮名表記によって作られた、視覚化された音のことである。視覚化された音は、音それ自体とはまったくの別物であり、この聴覚から視覚への転換が『伊勢物語』の表現を支えていると思われる。

仮名は文字それ自体に意味が孕まれている漢字と異なつて、〈音〉しか表現しない。仮名によって、和歌は一つの言葉で同じ〈音〉を持つ別の言葉を掛け合わせ、一文字ずつ隠し詠み込むような技法が可能になった。仮名で書かれること、つまり、〈音〉を表記することによって、音声それ自体よりも言葉の多義性が表現できるようになった。こうした仮名の可能性を和歌という韻文のみならず、散文においても試している作品が『伊勢物語』ではないだろうか。

『伊勢物語』の研究史は長い。鎌倉時代以降注釈書も多く、主に「古注」として知られるものは、竹岡正夫『伊勢物語全評釈―古注釈十一種集成』（右文書院、一九八七年）にまとめられている。<sup>(1)</sup> それ以外にも、片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション』（和泉書院）、片桐洋一・山本登朗編集『伊勢物語古注釈大成全七巻＋別巻一』（笠間書院）などがある。

一方、他の文学作品同様、『伊勢物語』の研究史においても成立が問題となった。在原業平らしき人

物を主人公「男」としながら、男の名前を仄めかすことはしても決して明記しないこの物語は、『古今和歌集』と密接な関係にある。『古今和歌集』で業平を詠み人とする歌は三十首あるが、これらは『伊勢物語』では主人公「男」の和歌となっている。また、物語内に登場し、名前が明らかとなる人物の多くは史実でも在原業平と交流があることや近い関係であることが認められる。

このような在原業平と『古今和歌集』の関係から『伊勢物語』の成立時期が想定された。特に片桐洋一氏の論は多くの研究者に影響を与えた。『業平集』の三本、群書類従本、在中将集、雅平本がそれぞれ成立時に、その時点での『伊勢物語』の状態を反映しているとし、現在の定家本百二十五段より小さな章段構成であったという論である。

その論では『古今和歌集』以前に「第一次伊勢物語」として二十段ほどの形で存在しており、『後撰和歌集』以後、増補成長した「第二次伊勢物語」、『源氏物語』が書かれた頃にはほぼ現在の形と同様の「第三次伊勢物語」があったとされている。これはいわゆる「三段階成立論」として知られている。

片桐氏の成立論は、玉上琢彌氏（『物語文学』増選書、一九六〇年七月）が紹介し、日本語学の立場から辛島稔子氏が支持し、大津有一氏も評価した。山本登朗氏は、片桐氏の成立論を肯定しながら、作品読解の歴史である注釈や享受史などから作品本来の読解を探究している。<sup>(5)</sup>

一方、この論を批判したのは福井貞助氏や石田穰二氏である。福井氏は「資料的限界を超えるには、構成および構造の域における分析から導き出されなくてはならない」とし、石田氏は初段と二段が緊密に連繫していることなど、成立時期が異なるとされる段の共通性や対応関係という表現や構成意識を論

拠にした。<sup>(8)</sup> また、渡辺泰宏氏は片桐氏の論証にした『業平集』の不確かさを論じた。<sup>(9)</sup>

他にも山田清市氏『伊勢物語の成立と伝本の研究』（桜楓社 一九七二年）、塚原鉄雄氏『伊勢物語の章段構成』（新典社研究叢書23 新典社 一九八八年）、河地修氏『伊勢物語論集―成立論・作品論―』（竹林舎、二〇〇三年）、田口尚幸氏『伊勢物語相補論』（おうふう、二〇〇三年）らが片桐氏の成立論に疑義を唱えた。しかしながら、現在でも、片桐氏の論が学校の国語教育の場で「定説」として紹介されている。

本書では、『伊勢物語』を一作品として読むことを実践した。石田氏が「いわゆる成立論は、解体に熱心でありすぎはしなかったか」と述べる通り、片桐氏の成立論の元では、成立が同時期とされる段のみが考察対象となりうる。初段の初冠に始まり、終焉で閉じる「男」の一代記風と紹介されるこの作品が、そのように段ごとに成立時期が同じか否かに重点を置き、分断された読解しかできないというのは矛盾してはいないか。

作品内で用いられるいくつかの表現に注目し、成立が異なるとされる段でも共通した意識で扱われていることを確認すると、物語内で一貫した姿勢で言葉が扱われていることが分かった。これはそれぞれの和歌が詠まれた時期が異なっていたとしても、現存する定家本『伊勢物語』はほぼ一回で成立し、「作者」あるいは「編者」と呼ぶべき人物の手によると考えられる。

『伊勢物語』の作者については諸説あるが、紀貫之を想定する論が有力と言える。<sup>(10)</sup> 『古今和歌集』の編者の一人であり、『土佐日記』の作者として知られ、仮名の可能性を様々に試みた人物といえよう。『土

佐日記」貫之自筆本を忠実に写した為家筆本は、仮名で表記することを強く意識したものであると神田龍身氏によって論証されている<sup>(11)</sup>。『伊勢物語』も漢字仮名交り文などではなく、原則として、全文仮名書きのテキストだったのでなかろうか<sup>(12)</sup>。

また、「歌物語」という言葉は、平安時代の作品内では、和歌とそれに関した話という意味で使われている<sup>(13)</sup>。文学用語として「歌物語」という分類がなされるようになったのは明治以降のことである。福井貞助氏によると、明治二十五年（一八九二）の大和田建樹氏の『和文学史』に『伊勢物語』や『大和物語』を指して使われているが、普及させたのは、明治三十二年（一八九九年）に『国文学史十講』を刊行した芳賀矢一氏である<sup>(14)</sup>。

この「歌物語」という形態は、折口信夫氏によって、人々に口頭で語られていたことが述べられ、それを踏まえて益田勝美氏が、口承文芸段階の「歌語り」を基盤にし、「歌物語」となったことを説いた<sup>(15)</sup>。口承段階の歌語りから歌物語へ発展したものと説明は、現在刊行されている辞典類にも引き継がれている<sup>(17)</sup>。歌物語の文体から口承的要素の反映を立証した阪倉篤義氏により国語学的側面からの援護を受け、後に益田氏は、歌物語を広義の説話文学に属すると位置づけている<sup>(19)</sup>。実在の人物が登場するという点からも説話文学との接点はあるといえる。

「歌語り」については、『枕草子』の第七十四段「宮仕へ人の里なども」に、「有明などは、ましていとめでたし。笛など吹きて出てぬるなごりは、いそぎでも寝られず。人の上ども言ひあはせて、歌など語り聞かまに、寝入りぬるこそ、をかしけれ」（『新編日本古典文学全集』小学館、一九九七年による）

のような人の噂話と歌が併せて語られているように歌の詠まれた状態を表すとされ、『紫式部集』にも例がある。

このように口承を発端とした「歌物語」に分類されている『伊勢物語』だが、私はこのような立場をとらない。歌物語とは次元を異にしたテキストが『伊勢物語』であると考え。『伊勢物語』が口承の書記化された物語としてあるのではなく、初めから仮名を駆使した、書かれた音声の世界としてあるからである。

本書では以上のような問題意識のもと、仮名の可能性と〈音〉への関心が示された章段について次のような構成で論じる。

まず第一部では、仮名と〈音〉の関係について注目した段について論じる。

第一章では、第九段に登場する「みやことり」について論じた。「白き鳥の嘴と足と赤き」という鳥の実態よりも、「すみだ河」という場所に白い「みやことり」がいることを重視し、「みやことり」が名前に負わされた意味を考察した。仮名によって広がる色のイメージを用いた表現であることを指摘した。第二章では、第十三段の「むさしあふみ」という言葉について、手紙を受け取った女が理解できたのは、第九段での「京にその人の御もとに」と修行者に文を託す場面が伏線となっていることを論じた。東下り章段に連繋した東国章段であるという関係を踏まえ、第十三段内のみで考えるべきではないことを述べた。

第三章では、第二十三段の「けこ」という言葉に注目した。多くは器を意味する「筒子」の漢字があ

てられるが、「男」が高安の女に通うことになった理由が経済状況の悪化であることを根拠に、「家子」の可能性を論じた。つまり、「男」が裕福だと思っていた河内の女は、召使に対して食料を制限して分配する女主人であり、その姿を見てしまったことにより、決定的に通わなくなるという解釈である。

第四章でも前章で対象にした第二十三段を中心に、作品世界で詠まれる和歌を効果的に演出する音声や音楽の手法について考察した。『伊勢物語』内に音楽演奏場面が少ないことから、和歌を詠むことを物語内で聴覚効果として重視していたことを述べた。

第五章では、第四十五段で「男」が詠む二首の和歌の解釈を中心に考察した。この二首の和歌の解釈は、季節の移り変わりを詠んだ表面的な意味にとどめず、物語の表現、状況設定を反映した解釈をすることによって、亡き女を悼む挽歌となる。歌集の詞書と違い、物語内で詠まれる和歌という位置付けから、『伊勢物語』における和歌の意義を論じた。

第二部では、『伊勢物語』を一作品として読むことを実践した。各段は多く「昔」と始まり、一段完結の形をとるが、前後の段には構造や表現の相似や反転させた関係があることが指摘されている。しかし、それだけではなく、第一部で論じた〈音〉の意識が『伊勢物語』には通底している。

長谷川政春氏が「核となっている章段のプロットや事項や特徴などに焦点をあて、あるいは拡大解釈をして新たな章段を展開しているのである」と述べるように、<sup>(20)</sup>『伊勢物語』の構成は、有名章段と呼ばれる段を中心としている。まず、物語前半部に二条の後章段があり、その一件を原因にしたかのように京から離れる東下り・東国章段への流れがある。後半部には、二条の后と同じく高貴な女性との禁忌の

恋である齋宮章段と、その血縁者である惟喬親王章段がある。これらの章段に付随する段について考察し、作品内で各段を対応・照応・反響させていく『伊勢物語』の方法について、同じ〈音〉を使った表現に注目して論じた。

第六章では、『伊勢物語』中、最も多く三度実名で登場する、紀有常が実際の在原業平とは義理の父と息子という関係であったにもかかわらず、作品内で「友だち」と設定されていることに注目し、『伊勢物語』における「友」・「友だち」について考察した。「友だち」と設定される「男」と有常が、惟喬親王という文徳天皇の第一親王でありながら、帝位につけなかった人物の供をする意味に、「友」と「供」という対極にある人間関係を表す言葉と同じ〈音〉であることによってイメージレベルで繋がる力があることを指摘した。そこには、「やまと歌」によって風流な精神的世界を共有する者たちの集合としながらも、その核となる存在に惟喬親王を置くことで、根底には政治的敗北者の連帯感が存在する。第七章では、第三十九段で「たかい子」、第七十七、七十八段で「多賀幾子」という高貴な女性の死を描く意味を考察した。この二人の女性の名前の〈音〉が二条の後の名前である「高子」と同じであることを指摘し、第三十九段前後には二条の後の章段の発端である色好みの側面があり、第七十七、七十八段前後には、二条の後章段の結末となる政治的側面があることを確認した。二条の後の章段は、第六段で女が鬼に食われるという異界で一応の結末は描くものの、実際は兄たちに取り返されてしまう悲恋に終わる。この二条の后を密かに葬るため、同じ〈音〉の名前の女性の死が描かれていると論じた。

第八章では、短い段が連続する短章段に「色好みなる女」「つれなき人」と表現される女性が登場す

ることに注目した。他にも男性がいる「色好みなる女」、なかなか会うことができない「つれなき人」という女性は、二条の后と齋宮のイメージをずらした存在であり、有名章段の間に配置された短い段に登場することにより、二条の后と齋宮のその後ともいべき意識で描かれている点を論じた。

最後に現代の享受史として、日本各地に残る業平伝説についてまとめた。特に愛知県内に伝わる伝説を中心にした。東下りをはじめとして各地に赴く「男」Ⅱ在原業平の話として日本国内に散在するこれらの伝説は、もう一つの『伊勢物語』の享受の形である。消えゆく前に系統立てて総合的に論じていく必要がある。

このように、本書では『伊勢物語』の仮名に注目した意識と表現を考察し、有名章段―二条の后章段・東下り章段・齋宮章段・惟喬親王章段―だけではなく、これらの章段を中心に作品全体を通して読解できることを論じた。『伊勢物語』は和歌と仮名の可能性を広げた作品だという、文学史上の位置付けを示すことができれば幸いである。

## 注

- (1) 源経信『知頭抄』、一条兼良『愚見抄』、肖柏『肖聞抄』、清原宣賢『惟清抄』、細川幽斎『關疑抄』、北村季吟『拾穂抄』、契沖『勢語臆断』、荷田春満『童子問』、賀茂真淵『古意』、上田秋成『よしやあしや』、藤井高尚『伊勢物語新釈』。
- (2) 片桐洋一「在中将集成立存義」(『国語国文』一九五七年二月号)、「伊勢物語の成長に関する覚書」(『国語国文』一九五八年七月号)、「伊勢物語の研究 研究編」明治書院、一九六八年、「伊勢物語の新研究」明治書院、一九八七年。
- (3) 辛島稔子「伊勢物語の三元的成立の論」(『文学』29巻10号、一九六一年)のちに、大野晋「伊勢物語総索引」(明治書院、一九七二年五月)の「付録」収載。
- (4) 大津有一「伊勢物語」岩波文庫、一九六四年十二月。
- (5) 山本登朗「伊勢物語論 文体・主題・享受」笠間書院、二〇〇一年、「伊勢物語の生成と展開」笠間書院、二〇一七年。
- (6) 福井貞助『伊勢物語生成論』有精堂出版、一九六五年。
- (7) 福井貞助「伊勢物語の構成と構造」(『一冊の講座 伊勢物語』有精堂出版、一九八三年)。
- (8) 石田穰二「伊勢物語の初段と二段」(『文学論藻』48号、一九七三年十二月)、『角川ソフィア文庫 新版 伊勢物語』角川書店、一九七八年)。
- (9) 渡辺泰宏『伊勢物語成立論』風間書房、二〇〇〇年。
- (10) 鎌田正憲「考証伊勢物語詳解」(南北社出版部、一九一九年)以降、折口信夫『後期王朝文学史』(折口信夫全集1古代研究 国文学篇 中央公論社、一九五四年)、高崎正秀『物語文学序説』(青磁社、一九四二年)、森重敏『文体の論理』(風間書房、一九六七年)、中田武司『王朝歌物語の研究と新資料』(桜楓社、一九七一年)、山田清市『伊勢物語の成立と伝本の研究』(桜楓社、一九七二年)、長谷川政春『紀貫之論』(有精堂出版、一九八四年) 神田龍身『紀貫之―あるかなきかの世にこそありけれ』(ミネル

ヴァ書房、二〇〇九年)などが紀貫之の関与を論じている。

(11) 神田龍身『紀貫之―あるかなきかの世にこそありけれ』ミネルヴァ書房、二〇〇九年。

(12) ただし、人名については漢字表記が意味を持つ場合も考えられる。

(13) 『源氏物語』蓬生巻には「はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし」

(②三三〇)があるが、歌と物語というそれぞれ別のものとして解せられる。

(14) 福井貞助『歌物語の研究』風間書房、一九八六年。

(15) 折口信夫『歌及び歌物語』(『国文学註釈叢書』第十五巻 名著刊行会、一九三〇年)。

(16) 益田勝美「季刊 国文」第四号(東京文科大学国語国分学会、一九五三年三月)。のちに、「歌語りの世界」(『益田勝美の仕事2』筑摩書房、二〇〇六年)。

(17) 『岩波古語辞典補訂版』岩波書店、一九七四年。『和歌文学辞典』桜楓社、一九八二年。『角川古語大辞典』角川書店、一九八二年。『和歌大辞典』明治書院、一九八六年などがある。

(18) 阪倉篤義「歌物語の文章―「なむ」の係り結びをめぐって―」(『国語国文』第二十二巻第六号、一九五三年六月)。

(19) 益田勝美『古典とその時代V 説話文学と絵巻』三一書房、一九六〇年。のちに「歌物語の方法」(『益田勝美の仕事1』筑摩書房、二〇〇六年)。

(20) 長谷川政春「求心性・変成・歌物語―伊勢物語の方法と構造―」(『物語史の風景―伊勢物語・源氏物語とその展開―』若草書房、一九九七年)。

## 凡例

一、本書における『伊勢物語』の本文の引用は、学習院大学文学部日語日本文学科所蔵三条西家旧蔵伝定家筆本を底本とする、『新編日本古典文学全集』(福井貞助校注訳、小学館、一九九四年)を使用する。

一、『竹取物語』『大和物語』『平中物語』についても、同じく『新編日本古典文学全集』(片桐洋

一・高橋正治・清水好子校注訳、小学館、一九九四年)を使用する。

一、『うつほ物語』は『うつほ物語 全 改訂版』(室城秀之、おうふう、二〇一〇年)、『源氏物語』は『新編日本古典文学全集源氏物語』①⑥(阿部秋生・今井源衛・秋山虔・鈴木日出男校注訳、小学館、一九九四年)を使用する。

一、和歌の引用は、『新編国歌大観』(『新編国歌大観』編集委員会監修、CD-ROM版 Ver.2:角川書店、二〇〇三年)による。

一、『伊勢物語』古注釈の引用は以下の通りである。

『書陵部本和歌知頭抄』(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院、一九六九年)

『愚見抄』(塙保己一編『続群書類従 第十八輯上』続群書類従完成会、一九二四年)

『闕疑抄』(堀内秀晃・秋山虔校注『新日本古典文学大系 竹取物語・伊勢物語』岩波書店、一九九七年)

- 『拾穂抄』(片桐洋一編『鉄心齋文庫伊勢物語古注釈叢刊』第5巻、八木書店、一九八九年)  
『勢語臆断』(久松潜一監修・築島裕(他)編集『契沖全集 第九巻』岩波書店、一九七四年)  
『童子問』(片桐洋一編『伊勢物語古注釈書コレクション 第四巻』和泉書院、二〇〇三年)  
『伊勢物語古意』(賀茂真淵全集 第16巻)統群書類従完成会、一九八一年)  
その他の本文については、その都度注に記す。

仮名文テキストとしての伊勢物語——目次

まえがき	仮名の可能性と〈音〉への関心	1
凡例		11

## 第一部

第一章	第九段「みやことり」	23
	はじめに	25
一	東下りの理由	25
二	東下りの旅程	31
三	「みやことり」の正体	37
四	「名に負ふ」ということ	40
	おわりに	43
第二章	第十三段「むさしあふみ」	49
	はじめに	51
一	東下りの核・第九段	51
二	東下りの先の東国	54



三 京なる女……………	58
おわりに……………	65

第三章 第二十三段「けこ」……………

はじめに……………	69
一 「笥子」説……………	71
二 「家子」説……………	75
三 『大和物語』の場合……………	77
四 第二十三段の和歌……………	81
おわりに……………	83

第四章 伊勢物語の「音楽」……………

はじめに……………	89
一 『伊勢物語』に描かれる音楽・楽器……………	91
二 描かれない楽器「琴」——第二十三段の場合……………	95
三 聴覚効果としての和歌……………	100

四 『源氏物語』に描かれた楽器「琴」——第四十九段の場合……………	102
五 『うつほ物語』における和歌と音楽……………	106
おわりに……………	114

第五章 第四十五段「蛩」……………

はじめに……………	119
一 「蛩」の表象……………	121
二 「雁」の表象……………	122
三 二首並列の和歌……………	125
四 影響関係……………	128
五 「ひぐらし」の存在……………	132
おわりに……………	133
	136

第二部

第六章 惟喬親王と紀有常——「友」と「供」……………	143
----------------------------	-----

はじめに	145
一 紀有常と「ともだち」	145
—— 第十六段・第三十八段における関係	148
二 惟喬親王と紀有常と「男」	148
—— 第八十二段における関係	152
三 「狩り」と「やまと歌」	154
四 「友」と「供」	160
五 男性間における「友」	161
六 政治的関係に対する精神的関係「とも」	169
おわりに	171
第七章 崇子と多賀幾子——二人の「たかいこ」	172
はじめに	174
一 崇子内親王	178
二 女御多賀幾子	180
三 同音の名前	182
四 第三十九段たかい子登場前後	185
五 第七十七・七十八段多賀幾子登場前後	186
おわりに	191
第八章 『伊勢物語』の短章段	193
はじめに	194
一 短章段のグループ	194
短章段表 凡例	196
短章段表	204
二 「色好みなる女」「色好みなりける女」	207
三 「つれなき人」	211
四 齋宮章段の構成	215
五 「色好みなる女」「つれなき人」、二条の后と齋宮	216
おわりに	219
補論 『伊勢物語』と業平伝説	221
はじめに	221

一 業平伝説研究の現在——〈東下り〉関係——	222
二 業平伝説研究の現在——高安関係——	231
三 愛知県知立市における業平伝説	235
おわりに	240

初出一覧	245
あとがき	247

# 第一部